

1. 3月6日(啓蟄)ぐらい

ふわあああ...

私はベッドの上で伸びをする。

うん、今日も快調快調。

おちんちんも元気そうに朝立ちしている。

コンコン

「あやちゃん、入るよー」

おお、あの声はいとしのマイマザー。

今日も可愛いロリロリボイス。

お母さんが部屋に入ってくる。

とても自分の母親とは思えない幼いボディ。

非合法の若返りサプリの副作用だとかなんとか。

まあ、そんなことは置いといて、
お母さんは私のビンビンおちんちんにご注目。

「もう...朝からそんなに大きくして〜...」

ウブなお母さんは恥ずかしそうに両手で顔を覆っている。
開いた指の間からしっかり見ているのがバレバレだけど。

ちなみにお母さんはシングルマザー。

人工授精ってやつで、母体に負担もなく私は産まれてこれた。

良い時代になったもんだね。

...まあ、ちょっと間違えておちんちんがついちゃったらしいけど。

でも、今までなんの支障もないし問題ない問題ない。

まあ要するに、お母さんが初めて見たおちんちんは私のってわけ。

なんだかそれが無性にうれしい。

おっと話がそれまくったけど、
とりあえずアレだね。

お母さん、一発ヌイてくれない？

「な、なに言ってるの、自分でやってよ〜...」

ふふっ、お母さん、お願い。
愛してるよ。

私はお母さんを抱きしめながら耳元で囁く。

お母さんは私の押しに非常に弱い。

顔を真っ赤にしてうつむいたお母さんは

「もう...ずるいよ...」

そう言いながらも、私のおちんちんを咥え始めた。

んむ...ちゅぶ...

お母さんのたどたどしいフェラチオが愛おしい。
休日の朝にこんな贅沢ができる私は幸せ者だな～。

と、その時。

ピコッ

小さな電子音が鳴って...

ブーン、ブーン...

小さなものが私の部屋を飛び回り始めた。

おや、メカビーが起動したみたい、おはよう。

あ、メカビーっていうのは私が電子工作で作ったペットの機械蜂ね。

こう見えて機械いじりは得意なんだ。

ブーン、ブーン...

そのメカビーが...

パタパタパタパタ...

お母さんのお鼻の下で羽ばたきを始めた。

パタパタパタパタ...

むずむずむずむず...

メカビーの羽ばたきに合わせて

お母さんのかわいいお鼻が高速でブルブルと震えている。

お鼻に刺激がいっぱいたまっているようで、とうとう顔をしかめて口を開けはじめた。



「フガフガ...ふえっ、ふえっ、」

お、クシャミしそう。

お鼻をフガフガさせているお母さんの表情えっろいなー
そういえばクシャミ前の表情って、イく寸前の表情と同じだとか何とか。

そうするとクシャミはさながら絶頂かな。

いいねいいね～、

このままクシャミをかけられて絶頂というのもおつなもので...



ヘエィーッキシイッ！！

(ガブッ！)

みぎゃー！いったーい！

お母さんのクシャミで私の亀頭が思いっきり噛みつかれる。

「ご、ごめんなさい！私のクシャミ、歯を食いしばっちゃうから...ふあ...ぐしゅ...」

お母さんが口を開きかけてお鼻をぐしぐしこすっている。
こ、こらえてこらえて！

「ぐしゅぐしゅ…。ふう、なんとかおさまった～」

お母さんの顔が穏やかになる。

ほっ、よかった。

刺激があるのは好きだけど、さすがにこれは強すぎる。

ブーンブーン...

そのとき、空中を旋回していたメカビーが...

ピトッ

お母さんのお鼻に止まった。